

◎8:10 木地山に来ている。池原登山口から登りだした。急な斜面、ヒーヒーいって登っている。連日の雨で、地面がおおいに湿っている、木の葉がおおいに湿っている。足元に、いつもよく見かけるダニ君、アズキ大の身体に極細針金状の足、木々の枝と枝の空中には虎模様のクモ、巢の真ん中に陣取っている。

◎最近、5年ぐらいいかな、小さい草花、小さい虫、小さいかけらが目にとまる。昨晚、今回の山を久しぶりに同道したキヌさんが、一杯飲みながら話していた「星野道夫が書いている 今までは クマや ヘラジカ アザラシといった 大きな動物ばかり 撮ってきた 最近は 今まで気にも留めなかった 身の回りの 足元の 草花や 虫たちに 興味がわいてきた」その話を聞き、若く亡くなった彼が・・・と感慨深い。

◎先日、地元の役所で、会議の招集がかかった。「皆様は 地域の マイスターであります」「地域のシルバーの方々向けに 学習時間を作ってください・・・」2時間近く、「どうしましょう」「ご意見は」に終始し「5W・1H」の話は出てこなかった。せつかくの一日、くだらない集まりで午後の反日を無駄に過ごした。主催者の方々も、功成り名を遂げた方だと思うが、オレを含め、中途半端なマイスターを集め、切り出しに苦慮されたのか・・・。オレ思うに、会議にしろ、展示会にしろ、舞台、スポーツ観戦にしろ、ブーイングの出る招集はアカン。

◎30分ほど登ってくると、シャクナゲの木が出てきた。実はオレ、シャクナゲの花が好きです。白くほんのりピンクがいい、赤や白じゃなく、5月6月雨上がりの山で、白くほんのりピンクに出会うとうれしい。ここのシャクナゲの葉、太いのでは、我が家のタイサンボク並みの大きさ、もっと細長いものだったのでは。

◎昨晚、葛川キャンプ場で泊まろうとしていたが、時間があつたので、図書館で“木地師”のことを調べた。木地村を最初に訪れた時に、“木地師”に興味をもちいろいろ調べてみた。木地師とは、漂泊の山の民、惟喬親王のお墨付きを携え、制限さえ守ればどこの山の木を伐ってもいい、どこの山に住んでもいい、木が無くなれば次の場所に移動する、というように、全国各地に散らばり木地を造った。木地とはおなじみの椀や盆のこと、これを轆轤技術で造っていた。ここ、朽木の木地村、明治のころには何軒かの木地師が定住していたようだ。図書館にはたくさんの資料、郷土資料家やその関係の人の文章を、役所が丁寧にまとめている、2.3日かかっても読み切れないような資料が並んでいる。著者の先生が子供時代の歌を書いている。「しゃもじ しゃもじ・・・しゃもじで かかあの ぼぼをうった・・・」子供は音で囃していたが、大人は闇で、しゃもじで遊んでいたかもね。図書館を出て朽木の旧市街地に行くと木地屋があつた。よく目にする小ぶりな木工所の中に電動轆轤があつた。「どうぞ見てください」「へええ いいですか あなたは 先祖が 木地師？」と若い頑丈そうな兄ちゃんにたずねた。美術品を愛する工芸作家のようである。「これが昔の物」とケースのなかに入ったものは、ひとだかえもあるような器に、黒漆が塗られ、渋く鎮座していた。かつて、画像で見たが、飛行機や新幹線の先端部分も、伝統の轆轤技術がものをいい、町工場で造られているとか。現代でも木地で作った椀や盆といった生活雑記は、高級品として親しまれている。プラスチックよりずっといい。

◎標識がある。駒ヶ岳まで2.9キロと書いてある。山に登り始めた30年前から、山の地図にはコースタイムが書いてある。コースタイムとは、ここからここまで、普通の人普通のザックで何分かかるというもので、その道が登りの場合と下りの場合の両方が書いてある。ところが今、このようにキロ数で書かれると、地図上の直線距離なのか、地図上の曲りくねった距離なのか、曲りくねりにさらに、上り下りが加味された距離なのか、と屁理屈をこねてみたくなる。「山の標識にキロ数が書いてある」とネットで質問すると、「山での距離数は あてにならない 山の管理者、役所観光課が、書いているが・・・」と要領は得ないものの、「参考にならない」という意見が多い。ちなみに最近のオレは、荷がない場合、なんとかコースタイムで歩けるが、20キロぐらいの荷になると、1.5倍、しかも、2.3ピッチも歩くとぐったりして動けなくなる。

◎「おおお」目の前にでかいブナが現れた。杉の植林地帯が終わり、若く元気なブナに囲まれた。幹がヒトの胴ぐらいの太さのブナが続いた。クリのイガもたくさん落ちている、中身はとみるがほとんど中身は無い。獣君たちが食ったのか、鳥君たちにもあつたのか、そんなことを考えながら、でかいブナにぶつかった。よく見ると下の方で別れている、一本なのか二本なのか、まわりに比べずば抜けてでかい。

◎標識に、明神谷と出ている。「どこだろう 帰って調べてみよう」と調べたが地図には出てこない。福井から登った方のブログから、熊川の方向らしいが地図には出てこない。このあたりの山、高島トレイルという背骨があり、右から左からどんどん登れるようだが、勝手登山道、勝手標識、ということなのか、地図で調べても「わからない」ということが何度かあった。ネットに“明神明”という方のブログが出てきた。69歳、オレと同年輩、知られた声優さんだそうだ。「警視庁の警察官から不審尋問を受けた。理由が、速足で歩いていたから。ポケットから小さなバッグまで検査された。」「腹の虫がおさまらない。僕が悔しく悲しかったのは、警察官の問答無用の対応でした」オレは、前回で4回目、「またかいな 何でも 聞きな」というように腹も立てず、ニコニコしている、人それぞれだ。

◎ブナが多くなりだした 先ほどのでかいブナよりは、胴回りは小さいが、背が高く 堂々と、グイと上に伸び、太い枝も30本ぐらい放射状に上下に広がっている、空が見えないぐらいに葉が茂っている。「ええと ブナの葉は 高く 見えないなあ」と目を凝らすと、ギザギザが見える、こんな葉かと、木々に対して無知な自分を苦笑しながら見ていた。クリもイガがたくさん落ちている、青いものもある、落ちているのを見ながら、どれがクリの木、クリの葉は、上を見上げながらわかりかねていた。クリの葉は、多少細長い、とわかった。木肌はいまだにわからない。先日来の本、縄文時代から、「人々は クリの木を 植え 実を採り 材木を 使った」と書かれているのを読んでいたが、山に入ってクリのイガが落ちているのを見ながら、「どれがクリの木」とつぶやけば、木のカミサマは怒るだろうね。

◎この山には素晴らしい場所がある、素晴らしい池がある、この池は皆さんに見せたい、登ってきてこの池を見てほしい、というぐらいに素晴らしい景色だ。ぼちぼち見えるかなと下を見ると、きらり水面が光っている。尾根の中ほどが窪み、そこにいつも水が溜まっている、中の島があり木が立っている。雪景色もいい。モリアオガエルの卵が白く映えるのもいい。今はたくさん草が生えている。獣も鳥も遊びに来るのかな。「ここでテントをはるのもいいねえ」といながら実行していない、人の少ない山だ、今日は日曜なのに誰とも会わない。同道のキヌサンと池で会おうと別々に登った。「え 長靴持ってきてないの」「持ってきてない 今回は 福井方面に行く予定だったから」「遠いので いつもの 葛川キャンプ場と 木地山にしよう」という話になった。長靴がないのでは、何回かの渡渉がづらい、登り始めから、靴が濡れると山はづらい「オレ 尾根から登る」「じゃ 池で会いましょう」ということになった。池の周りをぐるりと回り、ザックに入っている敷物を出してごろり、空を見上げた。空を見上げる、これはいい、これをしたことがない、空を見る、木を見る、葉を見る、夜なら星を見る、これからはこの姿勢をなるべくするようにしよう。葉がざわめき、枝が揺れ、鳥が横切り。なかなかぎやかな景色だ。なんだか聞こえる、聞こえる、と鈴の音を意識し、しばらく寝転がっていると、不意に彼が現れた。

◎「蛭がうじゃうじゃ 長靴を這い上ってくる はらっても はらっても 這い上がってくる 気持ちが悪い 帰りは 駒を超え 木地山に降りよう そこなら最後に バシヤバシヤ 渡渉して 走れば すぐに車まで」最後なら靴に水が入ってもいい、急げば蛭も上がってこない、「でもいやだねえ 蛭は」と思いながら歩いた。

◎T字路に標識、右に曲がると森林公園と書いてあるが、行ったことがない。<この森林公園、調べてみるとなかなか立派な施設、滋賀県が運営する有料の場所のようだ、いずれ機会があれば行ってみよう。>標識には、中央分水嶺と書かれている。この尾根は滋賀県と福井県の県境だが、滋賀県には分水嶺が二か所あるのだろうね、湖西と湖東にそれぞれあるのだろうね。

◎次の標識が現れた、われわれはここから下る。“中小屋”と書かれている。まっすぐが“与之助谷”と書いてある。何度か来ているが両方とも聞いたことのない名だ。先ほども書いたが、ここらあたりは、正式な標式でも、聞いたことのない地名、どこだろうという名が書いてある。「さあ 下まで 1時間」と下り始めた。池のあたりで空が薄暗くなり、降るかと思ったが、また明るくなってきた。ここの一月、梅雨のような気候が続いた。今回も、「山はあきらめ アトリエで 飲もうか」と思っていたが、前日になって、登る日だけ晴れ、という予報が変わった。夕方出発し、キャンプ場で一杯飲み、山に登ってそのまま帰ろうとやってきた。「やあ 川が見えた」先日来の雨で増水している小川は、登山靴を履いたままで渡ることにした。蛭の姿はない。娘が作ってくれた“虫よけ液”を手のひらに付けては靴に塗った、渡った、走った、車を止めているところに着いた、無事帰りついた、暑かったので、大汗をかいた。

山口仲美著<今昔物語集>本の中身（これは先生の名の洒落ではないですぞ）の話の前に、名前を見この先生が男か女かと経歴を見た。○美という名前の男の知人が何人かおられる。“えみ”とか“ゆみ”という音なら迷うことなく女と判断するが“なかみ”という音はいかにも男っぽい。1943年生まれ、お茶の水女子大を出ておられるので、女の方のようだ。余談でした。先生、芥川龍之介が言った「野生の美」「美しい生々しさ」という言葉に触発され今昔物語集を読み始めたそうで、「古典とは思えないほど身近に感じられた 衣をすべて剥ぎ取って 本音だけで生きている人間の世界が 開かれている」とおっしゃる。「見栄も体裁もかなぐり捨てて どうしたら生きていられるかといったぎりぎりのところで 精一杯知恵を絞り 持てる力を最大限に発揮して 生きている人間たちに わたしはこの上なく共感を覚えた」とおっしゃる。オレも、今昔物語の存在は知ってはいたが、「おもしろい もっと読んでみたい 日本の物語りで こんな奇妙な こんな奇天烈な話は ほかにないのでは」とのめり込みつつある。この先生の解説を読むと、さらに「えええ そういうことだったのか」というような裏話、先生の想像話が聞け、ますます面白い。

まずは先生の解説。今昔物語集は1040の話がある。釈迦の話、靈驗譚、蘇生譚、親孝行の話、奇怪な話というぐあいで、さながら説話の万華鏡。31巻あるが、特に22以後にくりひろげられる日本の世俗説話の面白さは、たとえばやがない。1~5がインド説話、6~10が中国説話、11~20が仏教説話となっている。

今昔物語集は平安末期に成立した。だが未完成の古典。作者は完成させず、あの世に行ってしまった。だから、31巻からなるのだけれど、途中の8, 18, 21は巻名だけで説話が集められていない。おそらく作者は1300ぐらいの説話を集める予定だったのだろう。残された1040の説話にも、未完成の痕跡が点々と残っている。まず、話の途中で文章が切れてしまい、書きさしに見える説話が、わずかだがみられる。それから、ところどころ空欄になっている。原文では空白があるだけなのだが、それは、作者が後で調べて書き込もうとしていたところなのである。名前を後で記入しようとした、人名ばかりでなく、地名、年月日、官職名や年齢、あるいはすぐに書けなかった難しい漢字、などの箇所が空白になっている。<オレは この点 ネットを フル活用している>

今昔物語集の作者は誰か。残念ながら作者はわからない。いろんな説があるけれど、わたしは大寺院に所属していた無名の坊さんという説が、真実に近いように思われる。この無名の坊さんは、高遠にして崇高な仏教徒ではない。人間臭い坊さんだ。それは今昔物語集の説話を熟読してみるとよくわかる。けれども彼の人間を見る目は、この上なく確かである。だからこそ、こんな面白い作品ができたのだ。坊さんは、寺院内にある図書室によく出入りした。たくさん書物に目を通しているうちに、かれは一大野望を抱いた。インド・中国・日本という三国の説話を集めて書き記してやろうと。彼は、構想を建て、それに従って説話を集めては、一人コツコツと書き記していった。一日一話ずつ書いていっても、4年もあれば、1040話の説話を書き記すことができる。まったくの創作説話を1040も書くのは大変である。けれども今昔物語集には数多くのタネ本がある。たとえば、漢文や変体漢文で書き記された「三宝感應要略録」「暎報記」「大慈恩三蔵法師伝」「弘贊法華伝」「孝子伝」「日本靈異記」「本朝法華驗記」「日本往生極樂記」「注好選」和文で書かれた「俊頼髓脳」「伊勢物語」「古今和歌集」「後拾遺和歌集」「道信集」「元輔集」など。これらのタネ本を座右において、独自の筆を加え、独特の魅力を放つ1040の説話を書いていったのである。偏執狂的で、粘り強く、根気のある人なら、一人で十分なしとげられる作業量である。

今昔物語集は、不遇な作品だった。平安時代末期に未完成であったが、ひとまず作業終了後、奈良の寺院のどこかの片隅に、ひっそり眠っていた。鎌倉時代中期にそれを持ち出し書き写した人がおり、その書写本が残っている。江戸時代には挿絵入り本も刊行されている。芥川龍之介によってその文学的価値が認められるまでは、その評価は極めて低かった。源氏物語などの王朝文学とは違いすぎており、その観点からすれば、とうてい文学として認められるものではなかった。史料としても信憑性に問題があり、価値が乏しいといわれてきた。だが最近歴史家の間でもにわかにくローズアップされてきた。当時の生活の実態をリアルに伝えている面があるからだ。社会状況はどうだったか、人々は何を楽しみに生きていたのか、どんな商売が栄えたのか、どんな病気に苦しめられたのか、どんなものを食べていたのか、こうしたことを実に鮮明に解き明かしてくれる。では次に説話の話。

＜巻21の3人に知られぬ女盗人のこと：魔性の女＞

今昔、何れの程の事にか有りけむ、侍程（さぶらいほど）也ける者の、誰とは不知ず、年三十許（ばかり）にて、長（たけ）すはやかにて少し赤髭なる、ありけり。・・夕暮れその男が歩いていると、窓から手を差招く者がいた。男が「何か用か」と聞くと女の声で「申し上げたいことがあるので お入りください」という。「上がっていらっしゃい」と女が言うので、男は座敷に上がった。年のころ二十歳ぐらいの美しく魅力たっぷりな女、これほどの女に誘われてはと、男はついに二人で寝てしまった。夜になると、二人の男と、女が下女を連れてやってきて、上品な料理を盛りつけ、二人に食べさせてくれた。食べ終わり、男女が出ていくと、そのまま二人で寝入った。朝になると別のものが布団をかたづけ、朝食を、昼食を食べさせてくれた。そんな日が二三日続いた。女が「どこか行きたいところがありますか」と聞くので「知人のところに行き 話したいことがある」と答えると、女は男に、パリッとした衣装を着せ、立派な鞍を着けた馬、従者を三人付けて送り出してくれた。男が用を済ませて帰ると、馬も従者も消え、食事が出た。二十日ばかり経って、女が「生きるも死ぬも 私のいうことは おいやではないでしょうね」「むろん」「うれしい」などといって食事をする。誰もいないときに女が「こちらへ」と男を誘い、貼り付け柱に男を縛り付け、杖で男の背中を八十回も打った。「痛くない?」「たいしたことはない」「頼もしいお方ね」と懸命に介抱する。豪勢な食事をする。三日ほどしてまた、貼り付け柱に男を縛り付け、杖で男の背中を八十回も打った。女が「我慢できるの?」「できるさ」女は最初の時より一層誉めそやし、丁寧に介抱した。そんなことが続いたある夕暮れ、女は男に黒い衣装を着せて言った。「とある屋敷に行き 弓をはじいて合図をしなさい」「口笛を吹き 返答がきたら口笛の男に近づきなさい」「その男の連れて行くところで立っていなさい 邪魔が入ったら うまく防ぎなさい」「仕事が終わったら 分け前を といわれるが 断りなさい」男は言われた通りに出かけていくと、女のいう通り呼び寄せられ、同じような姿の二十人と、皆が服従する色白の男が一人、下っ端が二十三人いた。一団が京の町中の屋敷に押し入り略奪を始めた。男もうまく戦った。略奪が終わり、この男にも分け前をといわれ「何もいりません 仕事を見習っただけですので」といった。男が家に帰ると風呂と食事の用意をして女が待っていた。男は女が、離れがたく、いとおしく、思うようになった。強盗を働くことも七八回にも及んだ。あるとき女が「六角小路にある蔵に行き この鍵で扉を開け 荷をもっていらっしゃい」という。男は教えられた通り、蔵に行くと、欲しいものがそろっていたので持ち帰り、思いのまま、取って使い、二三年が過ぎた。しばらくすると妻が心細そうな様子で泣く「心ならず お別れするようなこともあろうかと思うと 悲しくて」男は「深い意味もないのだろう」と思って用足しに出かけた。二三日して帰ると、家が跡形もなく消えていた。蔵の在った場所も跡形もなく消えていた。男はどうしていいのか途方に暮れたが、今度はみずから、盗みの仕事をはじめ、男は捕らえられた。男は一部始終を自白した。その女は妖怪変化だったのか、家も蔵も消滅させ、多くの財宝、従者を引き連れ行方をくらましてしまった。男はその家で女と二三年暮らしたのに、女の正体など合点することなく終わってしまった。また盗みをしていた間も、集まってきた者たちがどういう者たちか、全くわからずじまいであった。ただ一度、他の者たちが一目置いて、畏れ敬うその男を、松明の光影を透かして見ると、男の顔色とも思われぬほど白く美しく、その目鼻立ちや面差しが、自分の妻にそっくりに見えたことが、唯一思い当たることであった。この話は世にも不思議な出来事なので、語り伝えられている。

山口仲美先生の話：平安時代も末期になると、京都の町は追いはぎが跋扈し、盗賊集団が大活躍する危険きわまりない場所になった。今昔物語集には様々なタイプの追いはぎや盗賊のいたことが明らかになるが、この説話は極めて訓練された組織的な夜盗集団の実態の報告と読める。女が色香攻めでこれと見込んだ男を一本釣りで仲間引き込む。目をつけられた男は、体力があり、あまり深く物事を考えたり、疑ったりもしない男。男の方の考え方や、感じていることはよくわかるが、女になると、俄然何を考えているのか、何をしているのか、謎のベールに包まれてくる。今昔物語集の作者は、この事件を男の側に視点をおいて書いているのだ。だから男の気持ちは記すけれど、女の気持ちは立ち入らない。男の視点から一貫して書かれたこの事件は、女を謎の存在に仕立て上げた。女の正体は、ついにわからない。最後まで神秘的なベールに包まれている。

「オレは 地図が 読めないのか」と笑ってしまうことが、最近、度々ある。かつて、「話を聞かない男 地図が読めない女」というフレーズがはやった。これは本の題名らしい。調べるとベストセラーの本だったようだが、残念ながら読んでいない。本の解説の続きに、こんな本もあると載っていた。「嘘つき男と 泣く女」「察しない男と 説明しない女」「セックスしたがる男 愛を求める女」こういう本も出版されたいが、二番煎じのにおいがする。考えてみれば、泣くだの、愛だの、若い男女の物語、この歳までくると、「話を聞かない男 地図が読めない女」というフレーズしか興味がわからない。本の解説によると、男と女は、千年万年前には、それぞれの仕事があった、男の仕事、獲物を追いかけて、追いつき、狩猟する仕事。女の仕事、子育て、住居のまわりの食料の採集。仕事は男と女の脳働きを変えたということらしい。男の仕事、獲物を追うためには、寡黙に走る、地形を熟知する、というようなことが大事。女の仕事、男が出て行ったあとの村、奥様連中との付き合いで、争いも諍いもなく村を守るためには、奥様連の話丁寧に聞き、男が獲物を担いで帰ってくるまで、みんなとこやかに暮らさなければならない、という理由だそう。

話を戻して、オレの事。最近の車にはほとんどナビゲーションというシステムが搭載されている。はがき大ぐらいやその倍ぐらいのモニターに、進行中の場所の地図が出てくる。ナビの出現には、「これはすごい こんな便利なものがあるのか」「ナビがなければ こんな所まで 来れないねえ」「こんな細い道まで よく知っているねえ」という反面「すぐそこなのに なんでこちらに 迂回するのだ」「こちらのほうが 近道なのに ナビは 頑固だねえ」と運転席で、賞賛とぼやきの両面でハンドルを握っている御仁が多いことだろう。

またまた脱線したが、ナビの地図の話、地図を、「北を上」という人と「進行方向を上」という人がいると思う。「地図は北が上」という鉄則はわかりきっているが、オレは「進行方向を上」を選んでる。これもいたずら心でネットを調べると、思いに反して、プロの運転手も、素人も「進行方向を上」という人が多いようだ。「北を上」という人は、地図なんだから、「こうしないと町を 地理を覚えられない」という方はなかなか知的で冷静だ。ナビを使いながら、地形を理解しているとはすごい。オレなど、ハンドルを握りながら、右か左か、ナビの画面を見ながら、気持ちまで右往左往する。地形を理解する人とは、えらい違いである。

我が家は、南北の軸がほとんど正確に建てられている。あるとき気が付いたが、北の窓に陽がさしている。「若いころからそうだったかな」と怪しみながらも、いつの季節にか、太陽が北の壁も照らす時期があるらしい。この話はこれ以上話すには、地学の基礎教養が低すぎ、話にならないのでやめておきます。ただ若いころから「駅まで10分 北に向かって歩く」とずっと思っていたが、地図を見ると、電車の線路が斜めに走っている。さらに先の、二つ目の線路も同じように斜めに走っている。この斜めを理解したのは、中年を過ぎてからだと思う。歩いてきた道から電車に乗れば、左右90度方向に、直角に走ると思っていた。地図ではどうも斜めだ、もっとよく見るとその斜めも、45度を通り越し、30度ぐらいに鋭角だ。それゆえに、線路と二つ目の線路に挟まれた町が、昔からある町がオレンヂから見ると90度回転している。これには驚いた、今まで北に向かえば駅、これは正しいけれど、もう一つの駅は90度左折しなければならない。若いころからまっすぐだと思い込んでいたが、実際は90度曲がっている、という驚き。

山の登るのが好きだけれど、常に地図は携帯しているが、地形をのみ込んでいない。最近、国土地理院の地図を印刷して、磁石とともにカバンに入れている。山の地図は、もっぱらコースタイムを見るのが主眼だった。そこからここまで、何分で行ける。「これなら簡単に行ける」とか、「こんなに時間がかかるなら どこかで一泊しなければ」とかに利用してきた。「君い 地図を読めなきゃ だめだよ」「天気図ぐらい ラジオを聞いて かかなきゃ」と豪語する方々とお会いしたことがあるが、いつも低頭していた。有名な山に行くと、標識が整備されている、踏み跡がしっかりしている、迷うことはない、雪山や霧が出た時などは、ヒトのケツを付いて歩いた。最近はそのじゃいけないと、事前に地図をよく見て、急な坂や曲がり道もわかるようになってきたが、まだまだ初心者である。

「道というものは まっすぐなものだ」と思い込んでいる節がある、これが一番の欠点だ。信州方面には何度も車で走っているが、今地図を見て驚いた。「今ごろ こんなことを 驚くやつがあるか」とあきれはてるかもしれないが、「中央自動車道は 諏訪湖のあたりで 60度ぐらい 曲がっている」「オレは ほぼ まっすぐ 北上している」と思い込んでいた。これはまことに天然だ、反省だ、これからもっと、地図を見るぞ。

1:40 取立山登山口を出発。ここは冬になれば雪が相当積もるらしい、来れるものなら来たいものだと思っていたが、今夜宿泊する“東山いこいの森”の営業が11月から5月まで閉鎖と聞き無理かもね。1時間登ってきた。林道に近いような登山道、これなら積雪時にも楽しく歩けそう、ラッセル遊び、カンジキ遊びをしてみたい。まだまだ木々が茂っている、紅葉にもなっていない、服装もTシャツ一枚で快適だ。トンボが多い、小ぶりのトンボ、小さい蝶もふらり舞っている。取立山は、何年か前に、関西学院の学生らの遭難事故で有名だ、彼らは積雪時、赤兎方面へ縦走予定だったとか。もう一つ、今回聞き知った話。江戸時代、加賀藩と勝山藩が取立山の稜線を境に定めた。このころこの辺に、加賀藩から焼き畑農業を目的に入植するものが増加した。勝山藩はこの季節入植者に対し“加賀もの”といって、厳しく年貢を取り立てたため、取立山の由来が伝わる、とは管理人氏の話。

先ほどから横に見える緑青々した山、あれが白山かなと思っていたが、目の前にほんまものの白山が現れた。「おおお 白山が見えた」緑青々ではなく、赤茶けた土やら岩、その間に緑の低木、大きな山容、立派な姿が左から徐々に高くなっていく。澤山さんがいたら「あれが〇〇 こっちが〇〇」と始まると思えば、彼の口調が懐かしい。小屋もいくつか見える、どれがどれだかわからないが、三年ぐらい前、キヌサンと石徹白（いとより）から三ノ峰・別山へと登った、噴火後の御嶽を見ながら合掌したという思い出。一番高いてっぺんも、4,5回来たことがある。てっぺんから東側にある、白水湖からの登りも何度か、あそこももう一度行ってみたいものだ。

1時間強で山頂に着いた、まわりは山また山、温かい、トンボが舞う、ササが揺れる、ススキが揺れる、紫色のリンドウがあった、赤く色づいた葉っぱ、黄色く色づいた葉っぱ、3時ころの山の上、下の方に霞が出始めている、斜めからさす陽の光が、木々の葉をキラキラ光らせる。1307M 取立山の標識。「まだ時間があるので 反時計回り 滝の方から帰りましょう」ということで下りだした。少し下ったところからてっぺんを見ると、てっぺんの山容、丸く腕を伏せたような、ヘルメットのようなまろやかさ、ササの葉が揺れている。少し行くと避難小屋があった。きれい、大きい、トイレまである、囲炉裏があり、薪もたくさん積んである、地元の人の手入れだろう。白山付近は避難小屋が充実している、来られるものなら雪の季節に来たいものだ。取立山は水芭蕉の群生地として有名だそうで、水の流れる湿原あたりに行ってみると、ちょろちょろ、水の流れの中から、若草色の細い新芽がによきによき出ている。12月になれば雪が積もり、何か月か雪の下で冬を過ごし、5月ごろになると白い花が咲きだすのだろうか、楽しみである。

山の上り下りには、尾根筋と谷筋がある。まず最初に申し上げるのは、個人的に尾根筋の方が歩きやすい、好きだ。というのは景色が、まわりが見える、山容がわかる、おおらかである。それに反して谷筋は、湿度が高い分、植物の緑がきれい、生き生き度が勝っている、コケなど今を盛りと輝いている。ところが濡れているぶん、土でも岩でも滑りやすい、これは怖い、滑って谷へでも落ちれば大怪我だ、涼しくきれいで清冽だけれど、まわりが見えない、山がわからない。まあ、皆さんそれぞれ好き好きがあると思いますが、あなたはどちら派ですか。そんなわけで前もって調べ、取立山は時計回りがいいと思っていたが、出発が午後なので、行って帰るだけと思っていたが、時間がまだまだあるのを幸いに「それでは滝をまわって 反時計回りで帰りましょう」と下り始めた。大滝のあたり、4時ころで薄暗い、ロープがある、岩も土も濡れている「おととつ」「あつたつ」と慎重に通り抜けた。この滝はもう少し明るい時間に見たかったが、暗くなりかけた山肌のなか、白い筋が流れ落ちている。まもなく陽が沈み始める、駐車場までもう少しのところ、真っ赤な太陽が日本海の方に沈んでいく、この夕日は感動的にきれいだった。

5:30 駐車場。10分でバンガロウ(3500円一棟)につき食事の準備。相・前コンビにいつも食材の用意をしていた。なんと「すき焼きですよ〜」肉・豆腐。ネギ・エノキ・シイタケ、ぐつぐつ煮えてくる「どうぞ食べて下さ〜い」「うまいなあ」ビールの乾杯のあと、日本酒の爛・焼酎の水割り・漬物・生野菜。山に行くといつも運動量がきついのと、粗食事で痩せて帰るのだが、相・前さんのおかげ、ぽっこり肥えるやも。星を撮ろうと三脚を持参したが「十五夜ですよ」と月は明るい、外燈も明るい、星は写らない、いずれもっと練習しなければ。

朝5:30起床、おじやをいただく、ドリップコーヒー系の増さん「旨い」たまらないねえ。計画段階で“広域林道”から“経ヶ岳”を通して“赤兎”に行く。赤兎で車隊と合流して帰る、なんて方法を考えていたが、昨日の取立山下りで、左の膝を痛めてしまった。「まさか登れないか どうぞ登れますよう」と痛み止めをもらって車に乗った。

広域林道報恩寺線、大野市の方から入って1時間で駐車場に着いた、10台ぐらい止まっていた。ほとんどの福井ナンバーの中に、三重・京都の車があった。度々車を降り道を尋ねたが、歩くと足が痛い、びっこをひいている「大丈夫」「歩きだせば直るのですよ」と登り始めるといつものようにぐいぐい歩ける、下りが心配だけれど、これなら最後まで行けそう、内心うれしく気持ちも安堵、「山は いいねえ」とひとりごと。3時間ぐらいのコースタイムだ。

1時間弱で保月、もう1時間弱で杓子（釈師とも書いてある）、続いて中岳。上の方にササが生い茂る、ポッコリ丸い山、愛らしいそのポッコリのなかを小粒のような人が何人か登っていく。その向こうに大きな稜線、あれが経ヶ岳だろう、立派な山容だ。今日は風がきつい、気候は暖かい、半袖Tシャツで寒くない。さあこれからあの登り、「うわわ 高い 相当時間がかかるかな」という山ほど早くついでしてしまうといういつもの経験、さらに30分かかるだろうと登っていたら山頂に着いてしまった。経ヶ岳1625M、下に別名“越前駒ヶ岳”と出ているが、そんな名は知らない、ということにしておこう、いまさら何を、としておこう。いい山だ、堂々とした山だ、気に入った。足は痛くない、このまま赤兎まで歩けそうだ、何人かの人に聞いたが、みなさん「そこへは行かない」「知らない」とおっしゃる。標識の先方面を探検したが、ササの茂った中に踏み跡がある、目的地が見える、もと来たところを帰るよりも時間が少なくない、いずれ、いつか、挑戦してみよう、赤兎まで行ってみよう。

1:40下山開始。下から見えた愛らしいポッコリ、上から見てもいい、ササが苔むした岩のようにまるっこく、その上を道が蛇行している、人の姿が豆粒のように小さく見える、あれだけの風が上では吹いていなかった、コンロを出してラーメンを食べた。反省は、煮るラーメンは水が多く要る、コーヒー用の水がなくなった、帰りの行動用水がなくなった、山のとっぺんは水が貴重品だ。

歩きながら時の経つのは早いものだと、来年の展覧会を考えた。3月末の展覧会日程を決めないといけぬ。もう半年を切った、「もうすぐ展覧会だ シャスタ倶楽部だ」と考えると、身体の中でスイッチが入る、気持ちが高揚する、楽しくなる、冷静にしかも燃えなければ、ハッピーな心持が待っている、下りながら展覧会のことを考えた。ここの下りは滑りやすい、ササの茎を握って、岩をつたって、かかとを踏ん張って、足は大丈夫だ。

愛らしきポッコリに着いた、着いてみるとただのササヤブだけれど、先に、もう一つのポッコリがあった。山の楽しみは「もう着くか」ということもあれば「まだまだ先だぞ」ということもある。「まだか まだか」と苦しみだせば楽しくない、そういう気持ちになれば山登りをやめよう。

2:30陽の光の角度が斜めになってきた。日没は5時半ぐらいだったか、夕方の雰囲気、陽光というのか、陽の光が斜めからササの葉を照らし、反射の光の色が鮮やかでなくなり、鈍く渋い光、こんな光を鈍色というのだろうか、この青黒さが心地いい。

やっと車までたどりついた、「この林道は 勝山に抜けるのでは」地元の方が「いけるよ この時間は無料だよ」教わり来た道と反対の方角に勝山方面に走った。走りながら思い出した、そういえば昔来た時に800円ほど払われ驚いたが、その同じ道のような、山の中をぐるぐる、斜面を走り抜けていく。澤山・猪熊・衣川・オレの男4人で赤兎の避難小屋で一泊した、寒い季節だったと思うが、雨か雪で着ていた服を濡らし、おっさん四人が下着姿で、大はしゃぎで写真に納まっている、そんな写真を先日発見した。その以前にも来ていたので、機転を聞かして料金所を回避、地道を走り、どこかで路上駐車、赤兎の手前の避難小屋に着いた。赤兎には登っていない、「雨なのでやめて帰ろう 今晩はここで大いに飲もう」てなことで話が決まったような気がするが、何年前のはなしか定かでない。まだその当時はカメラもフィルムだったので、日付などのデータがわからない。

ほとんど暗くなりかけた中、料金所もフリーパス、風呂屋を検索し“水芭蕉の湯”を発見、600円でも温泉に浸かり、ヒザを揉み、服を着替えさっぱりした。バンガロウに帰り着いた時にはもう真っ暗。電灯を点け、机を出し、水を汲み、コンロ・鍋を出した。「今宵は カレーとサラダ あて色々」「さあ乾杯 今日の山は良かった 明日は朝から 雨模様 明日は 登らない 登れない」お定まり、ビールから始め、燗酒、水割り焼酎、よき仲間、酒が旨い、飯が旨い。留守だと言っていた管理人氏、話が次々出てくる。「この辺りは一向一揆が盛んで 勝った が 勝山になった」「ヒメクルマの木 ホウノキ 花はタイサンボクに 似ている」「来年もっと聞かせてね」と別れた。

大鵬の飛翔（逍遙遊扁）

北冥（ほくめい-北の果て 水の色も黒ずんだ大海）に魚あり、その名を鯢と為す。鯢の大なること、その幾千里なるかを知らざるなり。化して鳥となる、その名を鵬と為す。鵬の背、その幾千里なるかを知らざるなり。怒して飛べば、その翼は垂天の雲の若し。この鳥や、海動けば則ち將に南冥に徒（うつ）らんとす。南冥とは天地なり。

◎大鵬という架空の鳥がいる。その大きさは普通の鳥の10の何乗倍の大きさ、甲子園球場どころか一つの町ぐらいの大きさなのか。その大鵬が北の果ての暗い海から、南の果ての大海へ、天の地といわれるところへと飛んでいく。

齊諧（せいかい-人名）は、怪を志（し-不思議な話を知っている人）る者なり。諧の言に曰く、鵬の南冥に徒（うつ）るや、水撃（海へ飛翔）すること三千里、扶揺を搏（う一つむじ風を巻き上げ）ちて上ること九万里、去りて六月を以て息（いこ-6カ月経ってやっと羽を休める）う者なり、と。野馬や、塵埃や、生物の息を以て相い吹けるなり。天の蒼々たる、それ正しき色か。（草原に揺れる陽炎 漂うちりほこり 無数の生物が呼吸するこの大気 空を見ると青々しているが あれは本当の色か 上空の鵬が 地上を見ても 同様に青々だろう）その遠くして至り極まる所無きか。その下を視るや、また是のごときのみ。

◎諧という人がいうには、大鵬が南の方に飛ぶとき、宇宙の高さまで飛び上がり、南に向かって半年間、やっと羽を休める。空を見上げると、青々として見える。天高く飛んでいる大鵬から地上を見れば、やはり青々見えるだろう。

かつそれ水の積むや厚からざれば、すなわちその大舟を負うや力なし。（深い水がなければ 大船は浮かない）杯水を坳堂（ようどう-窪み）の上に覆せば、すなわち芥これが舟となるも、杯をおけばすなわち膠す。（窪みに水をさせばちりが舟になって浮かぶが 水が無くなれば終わり）水浅くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば、すなわちその大翼を負うや力なし。（上空 大風が吹かないと 飛ぶには力不足）故に九万里にして、すなわち風ここに下にあり。しかる後すなわち今、風にのり、背に晴天を負い、これを天闕（ようあつ-遮る）するものなし。しかる後すなわち今、まさに南するを図らんとす。

◎大きな船を浮かべるには、大海が必要だ。水たまりや小川ではだめだ。大鵬が飛ぶためには、大空が、風が必要だ。大鵬は大空に舞いあがり、南に向かって飛んでいく。

螭と学鳩（ちょうとがくきゅう-ヒグラシと小鳩 鵬の飛びゆく姿を見て）とこれを笑いて曰く、我れ決起して飛び、榆枋（ゆほう-れやまゆみ）を搶（つ-林に飛び込む）くも、時にはすなわち至らずして地におつるのみ。なにをもって九万里にゆきて南するをなさんと。（我々は奮い立って飛んでも 地上にたたきつけられる なぜ鵬は九万里の高みに登って 南を目指すのか ご苦労なことよ）莽蒼（近郊の野原）にゆく者は、三飧（さんそん-食事）してかえるも腹はなお果然（満腹）たり。百里をゆく者は、ゆうべに糧をうづく。千里をゆく者は、三月糧をみつむ。（大きな仕事をするためには 大きな準備が必要なのだ ヒグラシや小鳩のようなちっぽけなものに 九万里の高みに上がる鵬が理解できようか）この二虫、また何をか知らんや。小知は大知に及ばず。少年は大人に及ばず。（小さい知恵は 大きな知恵には及ばない）なにをもってそのしかるを知るや。朝菌（朝できるキノコ）は海朔（かいさく-晦日と朔日-みそか）とついたちで ひと月 日本では 一日からみそかまで だろうね）を知らず。螻蛄（けいこ-蟬）は春秋を知らず、これ少年（寿命が短い）なり。（生まれてすぐに死ぬものが 長く生きながらえるものは わからない 朝露を受けて育ったキノコは 日に当たると枯れる なので ひと月の長さは想像できない 春に生まれ夏に死ぬ蟬は 春秋の長さは わからない）楚の南に冥霊（大椿-想像上の大木）なるものあり。五百歳を以て春となし、五百歳を以て秋となす。上古の大椿（だいちん-想像上の大木）なる者あり、八千歳を秋となす。

(冥霊という大木 500 年で春が来て 500 年で秋が来る 大椿という大木 8000 年を春とし 8000 年を秋とした) しかるに彭祖(ほうそ-人の名 800 年生きた)はすなわち今、久しきをもってひとえに聞こえ、衆人これを匹(あぐわん-あやかりたい)とす、また悲しからずや。(彭祖という人が 800 年生きた みな彼にあやかりたいという 情けない話だ)

◎虫や小鳥が、大鵬の飛ぶ姿を見て嘲笑った。「我々はちょっとそこまで飛んでも おっこちる 大鵬はご苦労なことだ」大鵬が飛ぶためには、大変な準備があることを、虫や小鳥はわかるまい。大鵬の知恵が、大鵬の長い時間が、大鵬の広い空間が、虫や小鳥はわかるまい。朝に生まれ夕に亡くなるようなものでは、長寿の事はわかるまい。ヒトは長寿にあこがれるが、情けないことだ。

☆ここからは、おいらが話します。莊子を読むときには、その心構えとして“勝手連”を心掛けています。勝手連などと恰好のいいことを申しますが、本当は理解しがたい部分、意味の分からない部分がたくさんある。それを解く教養、知恵が不足で、こんなことを言っております。さて、莊子も含めてこれらの思想、二千年以上前の中国の文章、宗教とは思っていなかったが、「いやいやこれは 道教という 宗教」という人もいます。二千年以上の年月で、中国の大先生たちが、解釈や注釈をつけている。またこの教えや文章が、日本に渡って、日本の大先生たちが、解釈や注釈をつけている。もちろんこれらの大先生たち、莊子が何を語りたのか、何を教えたいのか、忠実に文章をおこして、解釈、解説なさっているが、オレにはもうこんなものはいらぬ、お断りだ。莊子が言っていること、これを詩のような、散文のような、字の流れ、字の羅列として、その音を、香りを、メロディーを感じています。

蝸(ヒグラシ-カナカナゼミ)が登場する。小鳩と共演だ。セミの鳴き声はよく耳にするが、まわりの人たちが「あれは〇〇」といえば「あ そう」としか答えられない。セミの種類や名前を知らないのだ。ヒグラシは羽が透明で胴体が茶色と聞き、それなら知っている、見たことがあると思った。ヒグラシ蝉と小鳩が話す「あんな 鵬のような鳥 がかいだけだよ すぐにいってしまうよ」「鵬は恐ろしいが 我々の方がずっといい ここでのんびり暮らせばいい」なんて言っていたのか、話していたのか。ただ莊子先生、多分知らなかったのかもしれないが、蝉は2週~4週間しか生きないと思っていたのかもしれないが、蝉は幼虫の時期3年4年7年と土の中で生きているのだそうだ。

朝菌：朝に芽生え日暮れとともに消えてしまうキノコ。「今は もう 秋~」ではないが、少し涼しくなると山にはキノコが生えだす。旨そうにみえるやつ、半分腐ったようでとてもこれは食えないねというやつ、絵本にでも出てきそうなやつ、まっ白、まっ黒、いろいろ見ますねえ。「キノコは怖い」「食ってはいけない」というのを守っているが「これだけは食べられる」という言葉を聞き持ち帰って食ったのが、シメジ、そういったのが久子さん、天然の味だった。信州の山で「これは旨いよ 大丈夫だよ」と何人かが採っていたキノコ、テントまで数本持ち帰ったが、ぐにやりとしていたので食わなかった。山のなか、暗がりから陽の光に向かって、胞子を飛ばすキノコ、それこそすぐになくなるだろうけど、若い時の姿はそれなりに美しい。

「天を仰ぎ見ると 青い 天から 地上を見ても 同じように 青いだろう」という言葉は面白い、今でこそ衛星からの地球の画像を知っているが、莊子先生はそれが想像できたとは素晴らしい。「時空を超えて」という言葉があるが、人間が生きていく常識の時空、普通の人々が身体の中に持っている「体内時空」を超え、もっともっと大きく長く世の中を表現している。宇宙の話、千年万年の話、こんな話が次々出てくるのはいいねえ。大鵬は北の果てから南の果てに向かうという。ここはちょっと現実味を感じるのだけれど、現実味を感じるように設定したのか、出発点が北で、到着点が南でないといけないのか。当時、中国では、「地球は丸い」ということがわかっていたのか、いないのかは知らないが、それらのポイントが地上の話だというのがきにいらぬ、ねえ。

何年か前から、清子さんが、わがアトリエでシーラカンスの油絵を描いておられる。シーラカンスを中心に、アンモナイト、オーム貝などの古代生物、そのまわりに深海や宇宙が展開し、シーラカンスが悠然と泳いでいる。こういう不思議な組み合わせのテーマ、というのかコンセプトというのかで、絵を描いてゆく、展開していくことは、思いもかけない発想に驚き、オレにはこの発想、考えは思い浮かばなかったと思っている。主人公のシーラカンスがいて、そのまわりに空や宇宙の空間、思いもよらない動物や昆虫、草や木、なんだかんだが混ざりあい、せめぎあい、絵になっていく、絵ができあがっていく。もう一人シーラカンスの絵を描いていた友人がいたが、「エキゾチックな 風景だなあ」ぐらいに思っていた。古代生物はもっとたくさんいるんだよと時代別に絵を見せられると、見たことがあるなと思いつつも、世にも奇妙な奴がたくさんでてくる。化石から復元しているのだろうが、よくもあそこまで復元できるものだと感じ。

それはさておき 大石道夫著<シーラカンスは語る>シーラカンスの文字に惹かれ、図書館から借りてきた。先生は“DNA”の専門家です。本の中身のDNAの部分はチンプンカンプンですが、わかるところもあるので紹介します。

◎1938年のクリスマスの2日前、南アフリカの港町で、現地の博物館の学芸員<ラティマー女史>がいつものように漁師たちに話かけた。<Is there any interesting fish in your today`s catch=今日の水揚げで 何か 面白い変わった魚はいない?>ある漁師の獲物の中の魚を見つけ、彼女の目がひとときわ輝いた。その魚は1.5メートル、見慣れない大きな鱗、鮮やかな青色、何より体型が普通ではない。「私が 今まで見た中でも 最も美しい魚」と回顧している。クリスマスとはいえ現地は南半球、夏真っ盛り、冷凍設備もない時代、シーラカンスらしい、というスケッチが残っただけで話はストップした。それから14年後、待ちに待ったシーラカンスが漁師の針にかかった。「絶滅したはずの シーラカンスが 現在も 生きていた」というニュースが世界中を駆け巡った。1998年にインドネシアで、もう1種のシーラカンスが発見された。アフリカのシーラカンスは青色、インドネシアのシーラカンスは茶色。シーラカンスには背骨がない。シーラカンスは水深150~700メートルの深海に生息し、深海の魚を吸い込んで常食にしている。シーラカンスには合計8本のひれがある。そのうち対のひれ(肉鰭)にはいくつかの骨がある、動物の四肢ではないかといわれている。シーラカンスは卵胎生で生まれる。メスの体の中で受精後、胎内で育ち、稚魚が生まれる、哺乳類型の発生を進化する前段階とも考えられる。60年の長寿だ。肉は悪臭のある油がしみ込み食用にはならない。

もう一つ、先生の面白い話が載っているので紹介します。

生物の大絶滅：現在地球上にどれくらいの種類の生物がいるのか、その数はよくわかっていない。しかし、正式に記載されているものとして、ヒトと魚などの脊椎動物(約4万種)カニ・ムカデなどの節足動物(約12万種)タコなどの軟体動物(約5万種)昆虫類(約75万種)植物(約25万種)さらにまだ十分に記載されていない膨大な数のバクテリアなどの微生物などを加えると、数百万種の生物がいるのではないだろうか。これらの生物種はおそらくただ“一種一個”だった原子生命体が三十数億年かかって増えてきた結果である。ところが、20世紀を境にこれらの生物はさまざま勢いで地球から姿を消し始めた。すなわち絶滅し始めたのである。大隕石の衝突による白亜紀末の生物の大絶滅から約6600万年たった現在、どうやら、第六の生物の大絶滅が進行中であることは間違いない。今まで、たび重なる生物の大絶滅は隕石の衝突など自然現象が原因であったが、これらと違って、現在進行中の生物の大絶滅は、史上初めて、ある生物がほかのすべての生物の存在を脅かしている結果である。ここにいうある生物とは、もちろん我々ヒトである。自然条件下で絶滅する種は4~5年間に1種とされているが、現在の絶滅の速度は、ある計算によると、ブラジルだけで1日に1種、世界中で見ると1時間に1種、年間では1万~4万種である。実際絶滅してしまった鳥類はすでに100種以上、哺乳動物は80種に及ぶ。当たり前のことだが、いったん絶滅した種は決して地球に戻ってこない。また絶滅寸前の種は、鳥類の約11%、哺乳類の約25%、魚類の約34%に及んでいるという。<略>白亜紀末の生物の大絶滅が30万年かかったとすると、現在進行中の生物絶滅のスピードは、過去35億年のどれよりもはるかにしのぐという。<略>人口の増加と経済活動の活発化によって、地球上の我々以外の生物の生存に適した環境が失われ

つつあること、また生物の再生産可能数を上回る乱獲などが現代の生物の大絶滅の、最も大きな原因であることは誰もが認めている。我々は生物の大絶滅を前にして、それをみすみす見過ごしていくのだろうか。大隕石の衝突などは生物にとっていかんともしがたい自然現象であった。今回の大絶滅は、今からでも回避することは不可能ではないと信じたい。この深刻な問題を解決するために、今ほど我々ヒトの、叡智と勇気が試されることはないであろう。

16-080 シーラカンス-II 311016

ヒトの人口増加と経済発展が、ヒト以外の生物の大絶滅を招いているという。魚好きの日本人、日本列島のまわりの広大な海から魚を捕り続けた、昔は魚がどんどん捕れたが最近では捕れなくなった、魚がいなくなったということを目にする。山に行けば、害獣と騒ぐほどシカが増えだしたが、一度シカ肉の旨味を知ったら、たちまち日本のシカは少なくなるだろう。その点、牛・豚・鶏の事になると何も言わずに食料として食っている。文化文明が発達し「より快適な生活」「より豊かな人生」「より健康で幸福でありたい」これは人間にとって、欲しいもの、願うもの、手に入れるべきものだった。ヒトは文化文明を手に入れるため、後ろを振り返ることなく、日々、努力した、研究した、工夫した、いろんなことに邁進した。よくいう話だけれど「縄文時代の1万年は 人間の生活は ほとんど 変わらなかった」「最近の50年 100年 なにもかもどんどん 変わってきている」この急激な変わりよう、進歩なのか、豊穡なのか、何とも返事に窮するが、「急激な変化は よくないね」とオレは思っている。

「よりハイテック、よりハイタッチの製品を作り、外国との競争に打ち勝ち、経済を豊かにしなければ」

「せっかくある原子力発電、少しでも稼働させて、化石燃料の輸入を減らさなければ」

「これからは、介護と医療の時代。この分野で、外国人の客を招いて、外貨を稼がなければ」

「経済が強くなれば、日本を頼りにする外国が増えてくる。経済だ、富国強兵だ」

「土人のような人種、なんて失礼なことは言うてはいけませんが、土人であり続けることは、いいことかも知れない」

外国のニュースを見ていると、中東で、戦争をしている。戦争という名の殺し合い、内戦に近い戦争は一般市民が住む都市を住宅を攻撃する、それをニュースにするために、映像を映すために、ジャーナリストが入って世界に配信している。戦争は“力”と“宗教”と“民族”だ、オレはそう思っている。宗教や民族の事で他人を排斥する、同じように排除されるというのは、日本人の我々にはわからないが、やられたらやり返すことの連鎖反応がずっと続いて、「やり返すことが 目的になっているのじゃないの」という意見は、見当違いですかねえ。

先生、余談だがと前置きして面白い話、「外国、特にアメリカには、今でも生物の進化を信じないで、すべての生物は紀元前約4000年前に神が創ったという人たちが多くいる。彼らはそのことが記されている旧約聖書にもとづいて、神が万物を創造した、すなわち天地創造論を固く信じている。」DNAの生物学者がなぜこの話、と思う一方、科学一辺倒、経済一辺倒の今の世界で、ある意味での清涼剤的な爽やかさも感じる。そういう人が、あのアメリカに居ると、聞いたことはあるが、たくさんいるのかなと調べた。旧約聖書とは、ユダヤ教聖書の事だった。「神が世界を創造した」「アダムとイブが禁断の木の実を食べた」「アダムとイブの息子兄弟が 殺し合いをした」「ノアの箱舟」「イスラエルの地が与えられた」「モーゼ 十戒 ダビデ像（これは石膏デッサンで懐かしい-ペニスに金玉が素晴らしい） ソロモン」こういう知っている言葉が続々出てくる。ユダヤ人はアメリカに多いらしい。

先生が言う“一個一種”の生命体から、今の地球に存在する数百万の生物ができた。あのよれよれの海藻も、地中のミミズも、目には見えないバイ菌までもが、我々と同じ祖先だとは、これは本当に驚きだ。しかし、考え方を変えて、ヒトもミミズも同じ生物、同じ祖先、「仲よくしよう 何でもありだ」と開き直って生きていくのも面白い生き方だ。今まで、時空の問題、1万年1億年という時間の数字があり、分子や電子のまるで見えない小ささ、宇宙の果ての果て、こちらまるで見えない大きさ、これに加えて、地球上のすべての生き物、鳥も獣も虫も魚も草も木も、全部親戚だったとは、これは楽しい世界じゃないですか、なんでもありだ。